

## 満鉄 中央試験所

大陸に夢をかけた男たち (五)

杉田望

### 第四章 揺らぐ満鉄、試煉の中試

#### 日中全面戦争に突入

丸沢常哉が中央試験所所長に着任した年の昭和十二（一九三七）年、日本軍は盧溝橋事件を引金として、中山との全面戦争に突入することになる。

数年前、私はその盧溝橋を訪ねたことがある。北京から南西の方角に車で二時間ほどの距離だった、と記憶している。周囲は長閑な田園風景だった。明代末期か、それとも清朝前期だったか、いつの時代に作られたものであるかは、覚えていないけれど永定河にかかるといっていい橋、つまり盧溝橋の欄干に、無数の石仏が彫り込まれていた。

石仏は様々な姿態をさらし、訪ねる人に微笑みかける。石仏は、全部で百八体を数えるという。それは実に見事な景観だった。が、石仏をよく観察してみると、無惨にも顔面が欠け、一部の石仏は修復不能なほどに、痛々しく破損していた。「ああ、これですか、あるとき日本軍が撃ち放した銃弾の痕なのです」

案内に立ってくれた人は、すました顔でいったものだった。ぎくりとしたのは、私の方である。なるほど、石仏の顔面を鋭くえぐり取ったのは銃弾の痕のようだ。それに手を加えずに残しておくところに歴史を今に伝える熱意というか、中国人々の歴史観が滲み出ているように思えた。

その中国を相手に全面戦争を、わが日本陸軍は仕掛けたのだ。いや、正確に言えば、事件がどのように拡大するか、軍人たちは何の見通しもなく、事件がどのように進展するかの想像力を欠落させたままに、強硬意見に引きずられる形で、全面戦争へと雪崩込んでいったのだ。戦略なき戦争だからこれは悲劇である。

昭和十二年七月七日。その夜は、風はなくよく晴れ上がり、月のない夜であった。星空に遠く微かに浮かぶ盧溝橋の城壁の傍らで動く兵の姿がわずかに見えるだけの静かな暗夜であったという。事件発生当時、現地部隊の中隊長を務めていた、清水節太郎大尉が書き残した手記によれば、盧溝橋付近で演習中の日本軍の一個中隊に向けられた数発の銃声が、事件の発端であったという。

現地からの報告で事件を知った近衛内閣は一応不拡大方針を声明した。しかし、

近衛はすぐに動揺する。「一撃を加えれば、中国は屈服する」という、ほとんど根拠もなく、見通しもなく、まったく定見も持たない軍強硬派に圧され、近衛は内地三個師団を合む五個師団の現地派遣を決定して、中国側に謝罪と事件の再発防止の保障を要求した。軍事力を誇示すればなんとかなると、判断していたのだから、中国に対する認識は甘かった。

事件は日中全面戦争に発展し、増強された華北の日本軍は七月二十八日、北京・天津周辺でいつせいに軍事行動を開始、翌日には付近一帯の要衝を占領する。さらに対中政策では、陸軍と一線を描いていた海軍までが陸戦隊に出動を命じ、上海で銃口を開き、八月十三日に「第二次上海事変」が勃発した。ついに戦火は華中にまで拡大されることになる。

それでも緒戦では、日本軍優勢のうちに戦局は展開した。十一月に行われた杭州作戦で戦果を上げた日本軍は、敗退する中国軍を追い、松井石根司令官の指揮下の「中支那方面軍」が国民政府の首都南京を占領したのは十二月十三日。南京占領では、日本軍は残虐の限りを尽くした。平静を失った兵士たちは捕虜や一般市民までも虐殺し、婦人に暴行を加え、放火や略奪を繰り返した。

南京虐殺の報は、中国の人々に新たな憤激を呼び起こした。これより、国共合作で新たに編成し直された林彪指揮下の第八路軍一一五師団は万里の長城の平型関を突破して南下しようとする板垣師団を奇襲、大打撃を与える。

これは中国軍の初めての勝利だったが、日本軍は戦線を拡大するに従って、消耗戦を強いられるようになり、戦線は広大な中国大陸に延びきって、補給も限界に達し、戦略的には持久戦を余儀なくされる。こうなると、

「二ヶ月で決着する」

と杉山元陸相が天皇に上奏したことは、まったくデタラメ上奏となった。

以後、戦火は広州、漢口など中国全土に広がり、近衛内閣は不名誉な宣戦布告なき中国との戦争を「支那事変」と改称、十二年二十四日「北支処理方針」を閣議決定、翌昭和十三年一月十六日近衛内閣は、あの有名な「爾後国民政府を相手とせず」との声明を発表することになるのだ。

だが、南京陥落後、重慶に移った蒋介石国民政府は、徹底抗戦を叫び、中国ではいよいよ抗日の意気盛んとなり、とくに多くの中国知識人は中国共産党の指導する抗日統一戦線に参加し、戦線が延びきった日本軍の背後を突き、果敢なゲリ

ラ闘争を展開した。抗日戦線は防衛の段階から「積極的反撃」の新しい段階を迎えることになる。

それがまた、太平洋戦争へと最悪のコースを歩み始めることになるのだが、逆転を始めた歯車は誰にも止めることができないままに、事態は急激な勢いで破局に向かつて突き進んでいった。

### 揺らぐ満鉄の経営基盤

満鉄もまた戦局が急転するなかで、急増する軍需物資や兵員輸送など、鉄道輸送の需要に応えるため、まず第一に鉄道部門の増強、第二は軍需産業に資するこ  
とで、撫順炭礦を中心とする石炭・製油・石炭液化などの諸事業、第三は調査部  
および中央試験所を中心とする調査研究部門を三本柱として、事業を展開するこ  
とになる。

一方、中国大陸に対する武力侵攻の結果として、満鉄は占領地域の鉄道や交通網の維持管理を引き受けるようにもなり、満鉄の事業は軍の後を追うようにして、大陸一帯に広がりを見せていった。満鉄は中国大陸で植民会社として増殖ぞうしよくを重ねていく。だが、実際の問題の処理は、微妙だった。

同時に陸軍は、満鉄改組問題で手を焼いた経緯から、満鉄に対しては満鉄が満州と同様に、中国大陸でも強大なコンツェルンとして力を振るうのは困る、という考え方が濃厚であった。軍部も東京の政府内にも満鉄には警戒的だったのだ。最終的には満鉄は北支進出を断念せざるを得なかった。北支那開発にしても、中支振興にしても、重役のポストは内地の官僚たちに握られ、また、接收企業の多くは内地から軍の後を追うように進出してきた財閥会社や内地の新興資本が乗り込み、利権のほとんどを喰い荒してしまっただからである。

しかも、満鉄の台所事情は苦しくなっていた。というのは、ソ連から買収した北満鉄道の復旧事業、あるいは満州国から委託された「国有鉄道」の経営も必ずしも芳しいものとはいえず、さらに北支開発事業など占領地域における、開発資金の調達など、一般事業費は急速に膨らんでいたからである。

松岡洋右も満鉄総裁の職を薦められたときには、そのことは充分承知していたはずである。だから松岡は、総裁就任を幾度も岡辞したという経緯があった。いつてみれば、満鉄の歴史的使命はすでに終わり、松岡が総裁に就任したときの満

鉄は、いねば歴史的な転換の時期にあったのだ。

さしあたっては、開発資金の調達をどうするか。そのことで松岡は頭を痛めた。雄弁家としても知られる松岡洋右は、内地の資本家の間を遊説して歩き、満州農村を十五年で所得倍増してみせる、などとタンカを切ってみせたりもしている。いや、松岡総裁を苦しめたのは、それだけではなかった。満州国が成立したのにもなつて付属地行政が満州国に移管されたのは仕方のないことだとしても、満州重工業全社に優秀な人材を取り上げられた。

さらに満鉄の所管であった「大陸経営に関する政策立案」という重要な「権限」は、昭和十三年の興亜院こうあいいんの発足とともに興亜院に移管、さらに肝心な物動計画さえも企画院に奪われることになり、大陸での戦争激化は逆に満鉄の存在意義を低下させることにもなった。

### 満鉄「大調査部」の発足

そこで松岡洋右が総裁に就任して強調したことは、満蒙資源の開発と調査部の拡充強化だった。大陸に戦火が広がり、満鉄の位置が微妙に揺れ動くなかで、満鉄が生き延びる道はこれ以外ない」と、松岡洋右は確信したのであろう。

とりわけ、松岡が重視したのは、後藤新平以来の伝統を待つ調査部であり、後藤のひそみにならない調査部の拡充強化に並々ならぬ関心を抱いていた。が、当時の満鉄の調査部といえば、無惨に弱体化し衰退していた。

その調査部を何とか立て直すことができなにか、と真剣に考えたもう一人の男がいた。調査部の伊藤武雄である。

当時、上海事務所長の職にあった伊藤武雄は調査部出身の三輪武と相談して、調査部の再建を話し合うところから、歴史に残る大調査部構想は誕生するのである。

そこで伊藤と三輪の二人が、調査部を再建する上で確認したことは、満州と中国大陸の基礎的調査を主体にしようということであった。つまり、狙いは総合調査にあった。シニカルな見方をすれば、伊藤たちが構想した大調査部とは、まず「総合調査」を売りものとして、もう一度軍との濃密な関係を背景に、調査部の存在理由を主張していくことにほかならなかった。伊藤武雄がいうところのインテグレーションの形成とは、そういう意味に理解すべきだと思う。

さて、伊藤武雄の指示を受け、三輪武は独自に改革案を起草する一方で、上海と大連の間を往復しながら同志を糾合し、関係者との調整を精力的に進めていた。自然科学系の調査機関の位置づけをどうするのか、伊藤や三輪たちが、どう調整に動いたかは、記録はない。また、この問題で中央試験所の関係者がどう発言したかなど、丸沢所長を含め動静は不明である。

佐藤正典が中央試験所を代表する格好で改革論議に参加した、という関係者の証言がわずかに残されているだけである。その証言によれば、佐藤はそれほど議論を得意とする人間ではないけれど、このとき、いたいことだけは明確にいつているようだ。

例えば、現在の基礎・応用・工業化研究を進めるには、とくに「研究事業三年計画」との関連でいえば、予算として二百五十万円程度は必要だ、と佐藤は要求している。

それに佐藤は研究所としての「自主権」の拡大も主張している。伊藤らは佐藤の主張を容れ、そこで満鉄調査機関は中央試験所、鉄道技術研究所、地質試験所を含め、自然科学系の研究機関も、足並みを揃えることになった。三輪のドラフトは固まった。

こうしてまとまった調査部改革案を、どういう手順で上層部に伝えるか。調査部改組の考え方を、組織を通して調査部首脳に伝えたのだが、それはてんで相手にしてもらえなかったという経緯もある。

そこで三輪は奇策を思いついた。三輪は総裁の松岡洋右とは姻戚関係にあった。満鉄に入社する際も、母親が松岡を訪ね、挨拶している。そんなわけだから三輪は松岡とはごく親しい間柄にあった。

場所は奉天のヤマトホテル。その日はちょうど満鉄理事会が開かれていた。三輪はそのヤマトホテルのロビーで松岡洋右とばったり出会う。いや、三輪は松岡総載を待ち受けていたのだ。

「どうしている。で、今日は？」

松岡が声をかけた。

「調査部拡充案を出すために……」

ここに来ているのだと、三輪は告げた。

「金ほどのくらいかかる？」

「初年度七百五十万円、最終年度で千万円程度です」と三輪は答えた。

「わかった、詳しくは明日聞こう」

松岡はこの話に乗った。

いつてみれば、三輪が持ち込んだこの「大調査部構想」は松岡にすれば、まさに渡りに船ということだったのだ。だから松岡の決断は早かった。

「満鉄調査部を拡充強化することで、大陸における政治・経済・軍事の三者を包含する戦略参謀本部としたい」

と政府を口説き、そこで松岡は政府に二千万円という膨大な予算を認めさせ、調査部長には三井物産出身の田中清次郎を迎え、満鉄に大調査部が発足するのは昭和十四年四月のことであった。田中の待遇は副総裁だった。

調査部の人員も大きく膨れあがり、いつときは二千人にも達した。研究陣容や資金規模からいえば、これは大風呂敷を広げてみせた後藤新平が満鉄設立当初に打ち出した調査部構想の規模を遥かに上回るものだった。

### 華麗なマルクス主義者たち

大調査部発足にもなつて、満鉄は大量に調査マンを採用した。こういう仕事に役に立ちそうな人材を、どんどん中途採用したわけである。

この時期に満鉄調査部に入った主な人々を挙げるならば、伊藤好道、山口正吾、川崎巳三郎、平館利男、具島兼三郎、石堂清倫、石田清一、藻谷小一郎、野々村一雄、安藤次郎、土岐強、佐藤弘、石川正義、鈴木重歳、西雅雄、細川嘉六、尾崎秀実、伊藤律など、左翼陣営で論陣をはるそうそうたる顔が並んでいる。このなかには、戦後共産党や社会党の理論家、指導者として名を運ねた人物もいれば、エコノミストとして官庁や学界で名を挙げる人物もいる。

ことに尾崎秀実。尾崎は満鉄調査部のなかでは異色な人物だった。東京帝国大法学部を卒業、朝日新聞に入社して、ジャーナリストとして、人生の第一歩を踏み出し、また、第一級の中国研究者として知られる尾崎は、ユーモアのある男だった。彼の周辺にはいつも笑い声が絶えなかった。

尾崎秀実は当時、満鉄に籍をおき、その一方では、近衛内閣のブレーンとして、犬養健などと協力して、対中和平工作に従事していた。尾崎は「ソルゲスパイ事



件」の首謀者の一人として、終戦  
間際に刑死して果てる。

尾崎と同様に東大法学部から朝  
日新聞に入社、その後は企画院に  
転じ、戦後は日中友好運動に余生  
を捧げた小澤正元おざわまさもとは、尾崎と親交  
を深めた新聞記者時代の往時を、  
次のように振り返っている。

「尾崎は驚くほど交友関係が広が  
った。その交友関係のなかには、  
西園寺公も含まれていましたね。  
そこら辺りから入ってくる情報な  
んでしょうけど、組閣に関する情  
報などは、それは正確無比という  
か、あれは第一級の情報でしたね。

まあ、特ダネですよ。それを惜しげもなく、後輩や同僚にやっってしまう。尾崎は  
名誉心も世俗的な出世欲などケほどもなかった。日中戦争が始まってからは、彼  
は戦争の破局から日本をいかにして救うのか、ゾルゲとの交友も、そうした彼の  
愛国の感情から出たものだと思いますね」

その尾崎は大調査部の部長に就任した田中清次郎とは、ごく親しい関係にあっ  
た。そういうことで、尾崎の推薦があれば田中は、左翼人であろうとほとんど無  
条件で入れた。

それに調査部長の田中清治郎という人は大変おらかな人間であった。  
同じ時期、総裁室は調査部に対して、総裁特命事項として、枢軸国側と連合  
側との戦力比較の研究を命じている。この調査研究は企画院総裁の発案で、同時  
に企画院でも取り組まれた調査研究でもあった。

例えば、岡倉古志郎、玉城肇といった学者たちが『列強の戦時経済の調査』と  
いった同主旨の研究テーマを与えられ、研究調査をスタートさせている。どうい  
う経緯で満鉄調査部に割り振られたのかは不明である。

ただ、この前後に企画院の研究メンバーが共産主義運動にかかわったという理

由で、検挙されるという「企画院事件」が起こり、研究に支障が生じたために、急遽満鉄調査部に振りかえたのかもしれない。

ともかく企画院の鈴木貞一すずきていじち総裁は、ひどく急いでいたようである。

「期間は三ヶ月だ」

というのが注文だった。なんとも無茶な話だ。だが、満鉄調査部の士気は高かった。そこでの結論は、膨大な資源と生産力を待つ米国と闘えば、日本の戦力か  
らいつて、せいぜい二年しか持たない、というものだった。

「敗戦思想だ」

参謀の一人が怒鳴った。この報告に報告会に出席した軍人たちは激怒したのだ。それを見て満鉄首脳は顔面蒼白となった。いつもは大言壮語する調査部員たちも、このときばかりは、関東軍の参謀に面と向かって反論するものはいなかった。沈黙を破って、

「そうかもしれんね。そうだろうね」

と頷いたのは、中央試験所から出席していた佐藤正典ただ一人だった。佐藤は当時丸沢常哉の後を襲い、中央試験所の所長に就任していたのだが、科学者らしくそこでは冷静な判断を示している。

満鉄調査部が行った調査で、その評判を高めたのは、上海事務所調査室が中心に実施した「支那抗戦力調査」である。伊藤武雄によれば、この調査は上海同文書院出身の中西功なかにしきさおが中核的な調査スタッフとなり、昭和十四年から十六年にかけて実施したもので、調査で主眼をおいたのは、重慶ならびに抗戦地区の政治、経済力を総合的に分析し、抗日抗戦力を総合的に把握しようというものであった。そこでの結論は、抗日統一戦線が成功し、中国の対日抗戦力はなおきわめて強靱だというものであった。

「でき上がった当時は、軍にとつてずいぶん役にたつ資料ができたということ  
で、南京総軍から調査報告会をもちたいと申し込んできました。報告者は南京総軍に乗り込み、講演してくる。軍では大いに感謝して、これはぜひ、東京の参謀本部の連中にもきかせ、啓発してくれということになり、報告者のために飛行機を仕立ててくれました」

と伊藤武雄は当時を振り返っている。軍は調査結果に刈して、伊藤がいうように最大級の賛辞を贈ったものだった。中西功たち研究スタッフは有頂天であった。



ところが、その「支那抗戦力調査」は、同じ軍から今度は「敗戦思想ではないか」と嫌疑をかけられ、中西功など調査部の主要メンバーが昭和十七年三月に検挙され、伊藤武雄までが憲兵隊に拘束を受け、それが満鉄事件へと発展した。それは同時に大調査部の崩壊へとつながっていくことになる。

どうみても、満鉄調査部がまとめた「支那抗戦力調査」なるものが「敗戦思想」とはとも思えないし、そこではただ中国大陸で起こりつつある事態を正確に見通していたということにすぎない。

少なくとも軍部にとっては貴重な調査報告であった。満鉄調査部の知性は、事態を正確に見通していただけなのだ。にもかかわらずその判断力を失って、調査報告者に牙を剥き、これを弾圧したというのだからこれはもはや狂気というほかない。

ところで、満鉄調査部が果たした役割に関しては、幾つかの評価がある。調査部はリベラルな空気のなかで活動していたことは、関係者の証言にあるように、よく知られた事実である。その個々の満鉄に生きた人々の良心と歴史的に果たした調査部の役割とは、また別次元の問題として評価されねばならぬ、と思うのだが、佐藤正典は「満州に文化を残した」といつている。

それにしても、満鉄大調査部は短い命には終わったが、その活動は華麗だった。

### 生え抜きの所長誕生

昭和十四年四月、念願の大調査部が、満鉄発足以来の一千二百名におよぶ人事異動をもって発足すると、それを機会に松岡洋右は満鉄総裁の職を辞して、大運を去る。松岡慰留工作を試みる満鉄幹部もいたが、松岡の関心は内地の政局の行方にあつたようだ。

松岡の辞任にともなって、新総裁には副総裁の大村卓一が就任、また副総裁には満鉄の生え抜きでは初めて佐藤欽次郎が就任した。翌昭和十五年十月に、丸沢常哉は約束の期限だけ職責を果たすと、何の未練も残さずに内地に引き掲げている。

その後を襲って中央試験所の所長に昇格するのが次長の佐藤正典である。中央試験所の生え抜きとしては、もちろん、佐藤が初めての所長である。

佐藤は理事待遇を受けて、所長に就任している。その佐藤に後事を託すにあた

り、丸沢常哉は側近に、

「何かのときにこれを用だててくれないか」

と行って、残高三千円の預金通帳を渡している。佐藤正典という人は、金銭感覚に疎い人であった。何事につけても、大雑把なのである。半導体の研究で知られる、東北大学電気・通信研究所の西澤潤一にしざわじゆんいち所長は、佐藤正典の印象を次のように話している。

「突然、訪ねてくるのですね。それで幾晩も泊り込む。いや、佐藤さんだけだったら、父と学生時代からの友人ですから、それもわかるのですが、それが友人の友人なんかとかいう人を紹介してくる。戦後まもない時期で、出張できてもろくに宿屋もない、そんな時代のことでありましたが……」

西澤潤一の父西澤恭助にしざわきょうすけは、佐藤正典とは九州帝国大学ではクラスメートである。その縁故を頼って、西澤家を訪ねたということなのであるが、佐藤正典という人は、天衣無縫というか、明治の人間らしく、金銭は後からついてくるという思想の持ち主であった。給料を一晚で使い果たしたなどという武勇談も残されている。

「しかし、満鉄の理事待遇の中央試験所の所長が、それでは困る」

丸沢は後事を託すにあたって、三千円の預金通帳を残したのだ。丸沢という人は、自分のポケットマネーからアルバイト料という名目で根岸良二に生活費を渡すなど実に細かい気配りのできる人だった。

華麗な活動を展開した大調査部に比べ同じ大調査部のなかにあつた中央試験所は、いかにも地味な存在であった。あえていえば、石炭液化研究に対して、昭和十五年に朝日文化賞が贈られているのが唯一のエピソードといえようか。

中央試験所は時局の動静にはまるで無関心であった。ひたすら石炭液化、オイルシエールの開発、マグネシウムやアルミニウムなど軽金属の研究などを進めていた。

そのころの日本を取り巻く国際環境は非常に険悪なものになっていた。中国大陸での戦争も膠着状態こうちやくじょうたいに入り、丸沢常哉が大運を去った一年後の昭和十六（一九四一）年十二月八日、日本海軍の真珠湾の奇襲攻撃によって、日米両国に戦端が開かれた。大連で「重大ニュース発表」を聞いた佐藤正典は、くるものがきたと事態を冷静に受け止めている。

佐藤所長はあくまで無理をせずに淡々と職務をこなしていた。ただ、戦争が激化するにつれ、関東軍と中央試験所との関係も濃密となり、戦時下の要請に因應するため、新しい研究テーマも増え、所長としての仕事も多忙を極めるようになり、週に一度は大連と新京を往復する日が続いた。そのころから中央試験所の職員は急激に増え、研究助手や事務職員などを加えると、一千名を超える大所帯となっていた。

満州では満州国が誕生するとともに、満鉄の現業部門の分離独立など、各種の改革が行われ、昭和十年に科学技術の行政一元化を目指す大陸科学院が発足した。初代院長には、満鉄出身の鈴木梅太郎博士が就任、鈴木博士が途中で急逝、さらに後任を襲った直木倫太郎博士も就任まもなく逝かれ、その後には満鉄前総裁の大村卓一が就任している。以降満鉄中央試験所は、主要人事を満鉄系で押さえるなど、大陸科学院と密接な協力関係を保ってきた。

### 丸沢常哉を再び招聘

昭和十八年七月、戦況が緊迫の度を深めた時期のことであった。当時、満鉄総裁には昭和製鋼所の社長を務めていた小日山直登が就任していた。

その日、佐藤正典は新京の満鉄本社に小日山総裁を訪ねて、中央試験所の研究活動を報告することになっていた。小日山総裁は佐藤から満州化学工業の現状や中央試験所の現況などを聞いた後で、日米開戦以来の戦況に関する自分の認識を示し、こういった。

「今、満鉄は化学工業増強を推進する組織と指導者を必要としている。そこで私が私としては、満鉄の社内に化学工業委員会を設置して、その委員会の委員長として大阪に帰られた丸沢博士を招聘したいと、考えているのだけれど、どうだろうか」

大陸科学院の人事は満鉄人脈で抑さえられているとはいえ、戦局が悪化するにおよび中央試験所の位置は大変微妙になっていた。これよりさき、満鉄中央試験所を満鉄から分離独立させて「満州国中央試験所」に改組する話も出ている。

そういうときに、小日山は大村総裁の後を受けて総裁に就任した。小日山総裁は微妙に揺れ動く、満鉄を落ち着かせるには、化学の分野では学界の権威とされる丸沢常哉博士を再び満鉄に招聘することだと考えた。ともあれ、中央試験所の

研究活動を補強し、満鉄の化学工業全体を統括指導するような機関を作ることには、もちろん佐藤にも異存のあるはずもなかった。

丸沢常哉に小日山総裁から化学工業委員会の委員長就任の要請が出されたのは、小日山・佐藤会談が行われた直後のことであった。そう間をおかずに在阪の丸沢から返事が届いた。

「国家存亡の危急の時です。老骨に鞭をうって献身する覚悟です」と返書に認めてあった。

丸沢にとって、満州は三度目の勤務ということになる。三度目の渡満は単身赴任だった。丸沢は新京の満鉄理事會館に起居して、職務をこなしていた。

昭和十八年に「化学工業委員会」が新京に発足すると同時に事務局要員として、中央試験所の幾人かが事務局あるいは化学工業委員会の委員として、新京に赴任している。石炭液化の触媒の研究にあたっていた森川清もその一人だった。

## ついに国家総動員態勢へ

さて、この時期の満鉄中央試験所の業績を挙げるとすれば、阿部良之助博士の研究グループが中心となって開発した合成過熱汽筒油きとうゆの工業化がある。鉄道用機関車に使用する過熱汽筒油は、北米ペンシルバニアかソ連のバクー油田の原油にのみ含有されているもので、貴重な潤滑油であった。おりから日米開戦とともに輸入は途絶し、その代替品の開発が急びれていたのだ。

こういう事態になることを予期していたのであろう、研究開発に着手するのは昭和八年のことだった。阿部博士の研究室では、撫順炭礦から産出するオイルシエールの頁岩蠟けつがんろうを原料として、関東軍の協力のもとで開発を進めていた。

工業化にメドがつくのは昭和十六年のことであった。すでに過熱汽筒油のストックは底をつき、阿部らの研究で辛うじて間に合うことになった。この製品は「鉄潤二号」という名称で、満鉄だけでなく、朝鮮鉄道や内地でも鉄道省が採用し、戦時下の輸送に大きく貢献した。

佐藤正典が若い時分に研究した大豆油のエタノール抽出油が、満鉄と日産との協力によって工業化されたのに続き、この時期には合成アルコールが航空燃料として重視されるようになっていた。また、東北帝国大学応用化学科を卒業して、昭和十年に満鉄中央試験所に入所した五十嵐正次いがらしまさつぐがベンジン抽出による低温連

統装置の研究にあたっていた。

五十嵐は佐藤正典の九大時代の友人、東北帝国人学の西澤恭助教授の研究室で応用化学を学んだ研究者である。その五十嵐は橋本企画官が主催した「技術安全保障研究会」に出席して、当時の中央試験所の研究活動の模様を次のように証言している。

「私は昭和十九年に学位論文を出しているわけですが、他の実験室で仕事をやると、どんな学位論文ができるわけです。私はパイロットプラントで試験をやっていましたので、なかなか論文はまとまりませんでした。中央試験所で働いていて、学位論文ができないのかと、佐藤所長に怒られましたね」

戦時下とあって、研究者たちの意気は燃え上がっていたようである。ともかく、学位論文がいくらでも書けるほど、研究者たちは実験につぐ実験を重ねていた。

時代の波は容赦なく、満鉄中央試験所に襲いかかってくる。戦局悪化が伝えられる時期だった。そうしたなかで、関東軍の池田純久いけだすみひさ参謀副長が大運の満鉄木社を訪ね、ロケット兵器の燃料である過酸化水素の製造ができないものかと、相談にきたりもしている。

軍人が技術のことがわからないのは、仕方のないことだとしても、態度は高圧的である。満鉄が駄目なら三井か三菱かとも、池田参謀副長はいつたりもする。

また、研究者の一部はチチハル部隊に向いて化学兵器の研究に協力を余儀なくさせられるなど、中央試験所の研究者に与えられる研究テーマも次第に戦時色を濃厚にしていく時代であった。化学兵器の研究にどのように関わっていったかは、今ではまったく資料は残されていない。しかし、このころから中央試験所が関東軍との関係を急速に深めていくことは確かだ。それは当時の所長佐藤正典も認めているところで、佐藤自身幾度かチチハルに出張して化学兵器の生産についての相談に頂かたりもしている。

関東軍の注文は無理難題が多かった。満鉄と関東軍の間に立って、苦労を重ねたのは化学工業委員長の丸沢であった。丸沢は関東軍と幾度も衝突している。もともと温厚な人物で、減多に他人の前で怒りの顔を見せるような人ではないが、その丸沢が本気で怒り出したのだから、相当な無理難題をもちかけられたに相違ない。

満鉄首脳も国策的見地から、軍への協力体制を強化し、ともかく生産費や利潤

などは度外視し、何よりも生産優先主義の政策を取った。要するに、首脳部の誰かもが、拙速主義に陥っていたのである。このころになるとはや満鉄伝統の「自由闊達」な議論は社内から消えている。

「戦時態勢の緊迫感にせまられ、止むに止まれぬ情勢から誘発されたとはいえ、このことは満鉄中央試験所にとつても、所長である私自身にとつても、かつてない生涯での経験であり、誠に致命的な失敗だった」

と佐藤正典が痛恨の思いで、回想している金属マグネシウム製造の失敗談は、まさしくこうした時代を背景に起こった。

金属マグネシウム製造計画は、これも軍の強い要請で航空機の材料として、生産が企画されたものだった。技術的にも幾つか解決しなければならぬ問題が残っていたことは、当時の満鉄中央試験所の佐藤正典所長にもわかつていた。だが、軍の要請ということであれば、仕方のないことである。

これを受けて、佐藤正典は、社内検討委員会を発足させ、満州化学工業委員会の委員長を務めていた丸沢常哉満鉄顧問を中心に金属現業部門の責任者、各々の研究者や専門家を集め、さつそく検討を始めた。議論の末検討会議では「弗化マグネシウム直接還元法」を採用することを決めた。

同還元法は石橋研究員が中心となり、独自の着想で、開発した中央試験所自慢の技術でもあった。しかし、まだ完成をみた技術ではなく、実験プラントならともかくとして、経済性にも問題があった。にもかかわらず、「弗化法」と決したのは、せめても自分たちが開発した技術で製造したい、そうした空気が所内に流れていたからだだった、と証言する関係者もいる。それは、拙速主義でせかす軍部へのささやかな抵抗であったのかもしれない。

小日山総裁は立派な人物だったが、時局のためか、拙速に走った。検討委員会から報告を受けると、さつそく満鉄幹部を奉天に招集すると「弗化マグネシウム直接還元法」による生産の方針を決め、三千万円の予算と従業員百名の増員を決裁する。当時の三千万円といえば、巨費である。それをあつさりとは決裁するところに、時代の緊迫した空気が伝わってくるのだ。佐藤正典はマグネシウム製造工場の建設問題で忙殺される。こうしてどうにか工場用地も決まった。

昭和十八年、旧味の素の大連工場に「弗化マグネシウム直接還元法」による試験工場が完成する。例によつて、満鉄という組織はお祭り騒ぎが好きだとみえて、

新工場の門出を祝う開所式が盛大に行われる。ときの関東軍参謀長の笠原幸雄かさほらゆきお中将以下軍関係者、満鉄側からは小日山総裁など満鉄理事など歴々が勢ぞろいするなかで、式は進行した。

もちろん、工場建設に先立ち中央試験所の実験プラントで繰り返し、予備実験を行った。実験プラントではまあまあ成績が報告されている。

その意味で自信はある。が、いきなり商業規模の生産だ。技術者の間には一抹の不安はあった。さて、いよいよ試験操業に入るとの報告が佐藤正典のもとに届いた。

だが、予期したような成果は上がらないというのだ。研究実験データは一回の原料処理量を十グラムにしたらどうか、という意見も出された。しかし、計画ではいつきに十キロとすることになっている。

技術的には無謀だが、戦時下とあつては止むを得ない。技術者の総員がプラントにしがみつき、研究に打ち込む。こうして二ヶ月あまりが経過した。

佐藤正典はマグネシウムにはまったくの素人。責任者としては、現場に出て技術者たちを励ますことぐらいが、せいぜいできることだ。佐藤は歯ぎしりする思いだった。

技術者たちは、まだ原因が掴めないでいるのだ。結局はカーバイドのなかに存在する不純物のせいではないか、一応の中間報告があがってきたときには、華々しく開催された工場の開所式から二カ月をとうに過ぎていた。

満鉄の伝統にもう一つ「不屈の精神」というものを、書き加えなければならぬ。中央試験所の研究者たちは「不屈の精神」で日夜頑張っている。だが、長谷川事件の教訓もある。佐藤の脳裏をかすめるのは、あの事件のことである。

単純な精神主義では技術者を精神的に追い詰める結果にもなる。だが、拙速主義の関東軍の連中は待つてはくれない。「満州国産の飛行機を作る」と日夜の催促である。難しいのはそのところだ。

一縷いちるの望みをつなぎながら、それでも実験は繰り返し返されていた。だが、成果は上がらない。技術者たちの苦悩は、日増しに増していく。佐藤は「誠に耐え難い」と血を吐く溜息をもらしている。原因は反応炉の容量がいつきに増大したため、初期の還元反応が行われたいのではないか、という結論になる。これ以上、技術者を苦しめるのは、忍び難いことだ。佐藤は決断を下した。その翌日、新京に向

かう列車に乗った。

満鉄理事会館で佐藤正典を待っていたのは丸沢常哉満鉄最高顧問だった。丸沢は黙って佐藤の話に耳を傾けていた。丸沢も満州化学工業委員会の委員長として、弗化マグネシウム製造問題には、責任のある立場だ。試験操業が順調でないことは、もちろん、知っていた。だが、佐藤が計画を諦めることを、決断したことは、やはり、驚きだった。丸沢はしばらく考え込んでいた。

「佐藤君、これは君一人の責任ではない。最高顧問としての私にも責任がある」「いや……。これは、私の不明でして、ご迷惑をかけることになってしまいました。責任は私一人で取らせて頂きます」

「わかった、それでは二人とも、辞表を出そうではないか」

その場で二人は総裁室に小日山総裁を訪ね辞表を提出した。小日山は沈痛な顔で辞表を受け取った。翌日開かれた満鉄重役会議の席上で、佐藤正典は研究の経過、計画が失敗した原因などを、詳細に報告した。丸沢も特別に発言を求め、自分も最高顧問の立場にあり、その指導を誤ったことを、深く陳謝するとの簡単な発言をしている。議長席に座る小日山総裁は、二人に視線を送りながら、こういつた。

「実はお二人から辞表を預かっている。しかし、今や国家存亡の時です。ここで人事な人材を失うわけにはいかない。私は辞表を認めない。諸君はどうだろうか……」

重役たちに声はない。声無しを総裁提案を了承したものとみなし、小日山総裁は席をたった。しかし、二人に対する慰留工作を本気でやるのは、満鉄最後の総裁を務めることになる、当時副総裁の職責にあった山崎元幹だった。いや、それは小日山の指示で動いたのかもしれないが、終戦の難局のなか満鉄社員をまとめた男だけに、山崎元幹はなかなかの人物である。山崎の説得が功を奏し、二人はともかく満鉄にとどまることになる。それが後の満鉄関係者がいう「弗化マグネシウム製造失敗事件」の顛末であった。

## 目の前にせまった終戦

昭和二十年、戦局はますます不利に傾いていた。大運の中央試験所にも三月十日の東京大空襲の情報が入っていた。硫黄島が陥落して、米軍がついに沖縄に上



陸した。いや、すでに満州大陸にも米軍機が飛来して、大連も空襲の危機にさらされていた。

内地とをつなぐ関釜連絡船が米潜水艦攻撃の危機にさらされ、内地との連絡に支障が生じてきていた。それでもただ、満州に住んでいた人々に関していえば、日ソ不可侵条約をひたすら信じて、さしたる不安も感じることなく生活を送っていた。それに比べ、内地ではすでに物資が底をつき、庶民は米軍の空襲と生活苦に喘いでいた。その意味では、まだ満州大陸の方がましだったかもしれない。

関東軍の一部には、満州大陸に天皇陛下をお迎えして、米国に対して徹底抗戦を続けるなどという、ほとんど議論にもならない議論を本気になって交わしていた。

しかし、敗色は濃厚だった。昭和十八年に化学工業委員会の委員長に就任した丸沢常哉博士は、よく二年近くの間、馬鹿な陸軍の将校を相手に我慢をしてきたものである。だが、敗色が濃厚になると、軍はさらにヒステリックとなり、無理難題も極限に達していた。丸沢が関東軍との煩わしい交渉などで手を焼き、苦労を重ねていることに、大連にある佐藤も心を痛めていた。

昭和二十（一九四五）年五月、ドイツが連合国に無条件降伏、六月半ば、佐藤はその前年副総裁から総裁に昇格した山崎元幹の指示を受けて新京に出張した。恩師丸沢常哉には久しくあつていなかったもので、ご挨拶にと訪ねた。丸沢常成は、深刻な顔をしてこういった。

「僕は今度化学工業委員会の委員長を辞任すると、総裁に申し出ている。そこで後任人事に僕の後を引き受けてもらいたいのだ」

これ以上、化学工業委員会の委員長としてとどまれば、関東軍と全面衝突することになる、それでは満鉄に迷惑をかけることになるので、こちらで身を引きたい、ということであった。しかし、あまりにも突然なことだったので、佐藤は面食らった。

考えてみれば、恩師丸沢常哉は最も困難な時期に化学工業委員長としての職責を果している。老体でしかも単身赴任。関釜連絡船も敵潜水艦の攻撃で、交通に不便が生じているとも聞いている。戦局が悪化すれば、内地との連絡も途絶えるかもしれない。

「先生、後事の問題は別にして、この際ですからいつそのこと、大阪のお宅に帰

られたらいかがでしょうか」

「そうだね。僕のような老骨が出しゃばる幕でもなからう」

丸沢はいったんは内地帰還の意志を固めたようであった。だが、人間の運命とはわからないものだ。その直後、山崎元幹総裁から、

「丸沢先生から委員長を辞任したいとの申し出があった。そこでご苦労だが、先生の後任を引き受けてもらいたい」

との話があった。そこで佐藤は丸沢常哉の身を案じて、自分が委員長を引き受ける条件として、丸沢先生をぜひ内地に帰していただきたいと、山崎総裁に懇請している。

「わかった、考えておく」

その後、丸沢常哉と山崎元幹との間で、幾度か会談が持たれた。そこで山崎総裁は改めて、中央試験所の所長就任を懇請した。適当な人材がいらないというのが理由だった。それに時局のことも考えて欲しい、山崎総裁は搦め手で迫った。丸沢常哉という人物は、私心のない人である。こういう迫られ方には弱いのである。

佐藤正典が丸沢常哉と入れ違いに、化学工業委員会の委員長として新京に赴任するのは敗戦が迫った七月のことであった。当時、化学工業委員会には、副委員長を務めた菅野誠すがのまことのほか、これを補佐する格好で森川清など有能な幹部社員が配置されていた。化学工業委員会の仕事は広く満鉄関係の重要計画を推進することにあった。

八月八日。その日のことは佐藤正典の記憶に鮮明に残っている。ソ連軍が満州里マンチュリの国境を越えて続々と進入しつつあり、との情報が入ってきたのだ。

東京支社からの連絡だと、その二日前、広島広島の惨禍が伝えられてきた。佐藤はそれがもしかして原子爆弾ではないかと密かに想像した。そのとき、大連あった佐藤のもとに「幹部は十二日までに新京木社に帰任せよ」との連絡が入った。ソ連軍が新京に入るのは時間の問題だった。

佐藤は家族と水杯を交わし、懐には自決用の青酸カリの包をいれ、翌日、大連駅に向かった。人々は殺気だち、混乱は極限に達していた。大連新聞の号外は「あす十三日ソ連軍の新京参入」を報じていた。佐藤が覚悟を決めて、新京行きの列車に足を踏み入れたとき汗を拭きながら駆けつけてきた、思師丸沢常哉の姿があった。

「たった今、新京からのニュースが入ってね。新京本部の連中は、関東軍と行動をとともにして、東辺道とうへんどうに疎開することになった。これから新京にいつても無駄だ。止め給え」

そのときすでに新京本部は関東軍とともに事実上解体していたのだ。

そして、八月十五日。佐藤正典は中央試験所の所長室で、丸沢常哉と一緒に終戦の詔勅しよくちよくを聞いていた。初めて聞く天皇の肉声が、意外にも明瞭に聞こえてくるのが、佐藤には不思議な思いがした。

(つづく)

なお、挿入されている写真は原著とはことなり、戦略経営研究所の責任で入れさせていただいた。著作権などの問題がないように努めているが、万が一の場合には、ご容赦お願いする次第である。

満鉄本社（大連） <http://matsu.riks.kyushu-u.ac.jp/study/99various/22Manshu/Manshu.html>